

課題解決型会話における発話の重複：母語場面と接触場面の対照

An Analysis of Overlapping in Japanese Problem-Solving Discourse:
A Comparison of Native Language Situations and Contact Situations

渡辺 文生, 山形大学

Fumio Watanabe, Yamagata University

1. はじめに

本研究の目的は、課題解決型授業の擬似的場面を設定して収集した日本語母語話者同士による談話データ（母語場面）、日本語母語話者と学習者による談話データ（相手言語接触場面）と日本語学習者同士が「共通語としての日本語（Japanese as a lingua franca : JLF）」を用いて話し合う談話データ（第三者言語接触場面）をもとに（竹井・吉田 2018；竹井ほか 2018）、それぞれのデータの提案に関わる談話の展開部分に観察された発話の重複について分析・考察を行うことである。本研究で分析の対象とするデータは、異なる言語文化を背景とした学生によって構成される学びの場において「共通語としての日本語」がどのように使われているかを調査する目的で収集されたものである。

2. 発話の重複に関する先行研究

発話の重複に関する先行研究のうち、接触場面を対象とした研究として、木暮（2002）と徐（2016）を取り上げる。木暮（2002）は、発話の重複を①同時開始型、②終了みなし型（一致・不一致）、③割り込み型（調和系・調整系・独立系）に分類して、親しい友人2人による雑談の会話（初級・中級・上級）を分析している。母語話者と学習者の発話における重複のあり方については、②終了見なし型の不一致、③割り込み型の調整系と独立系の3つの重なりにおいて、量的な違いが見られたこと、中・上級学習者の場合、不一致による重なりは、倒置や言葉の付加を行うため、調整系の重なりは、情報の追加や関連する質問を行うために生じていたことを指摘している。本研究では、この木暮（2002）による分類を参考にして発話の重複を分析することにする。徐（2016）は、親しい友人2人による雑談の会話（上級学習者）を分析し、母語話者については、「相手のあいづちと重なる自発話の継続」の重複が多く、会話の進行を促進することも、妨害することもなく、「中立的」な重複を使う傾向があるのに対し、学習者は、「ターン取りのため」の重複が多く、会話の進行に影響を及ぼす重複を使用する傾向が見られたと述べている。

母語話者同士の会話を研究対象としたものとしては、竹田（2016）を取り上げる。竹田（2016）は、2種類（自由対話と課題達成対話）の対面会話を分析し、いずれのデータにおいても、重複発話が協調的な雰囲気を出することに大きく貢献していると述べている。特に、課題達成対話での協調性は、内容の同一性や共感性がわかるように、課題の答えが求められている箇所で発話を重複させて、合意形成の手立てにするという特徴を持つとしている。

3. 調査の概要

本研究の調査は、2016年6月～2017年6月に日本国内の大学において日本人学生、学部留学生・交換留学生18名（延べ）を調査参加者として、母語場面（日本人学生3名）、相手言語接触場面（留学生2名+日本人学生1名）、第三者言語接触場面（留学生3名）の各場面2グループの計6グループの会話データを収集したものである（竹井・吉田2018）。

表1 グループ別調査参加者の内訳

グループ	個人コード	母語	身分	レベル
母語（1）	JP_M2	日本語	学部生	母語
	JP_F1	日本語	学部生	母語
	JP_M1	日本語	学部生	母語
母語（2）	JP_M3	日本語	学部生	母語
	JP_M4	日本語	学部生	母語
	JP_F2	日本語	学部生	母語
相手言語接触 （1）	JP_M1	日本語	学部生	母語
	VN_F1	ベトナム語	交換留学生	N2
	UK_F1	ロシア語	交換留学生	N2準備中
相手言語接触 （2）	JP_F1	日本語	学部生	母語
	VN_F2	ベトナム語	交換留学生	N2
	CN_M1	中国語	学部留学生	N1準備中
第三者言語接触 （1）	CN_F1	中国語	学部留学生	N1
	KR_F1	韓国語	交換留学生	N1
	NZ_M1	英語	交換留学生	N3
第三者言語接触 （2）	TW_F1	中国語	交換留学生	N1
	VN_F3	ベトナム語	交換留学生	N2
	NZ_M2	英語	交換留学生	N2

調査においては、PBL型授業における言語使用に近い疑似的場面（課題解決型三人会話）でのインターアクションを分析するため、「附属高校から大学体験の目的で訪問する女子高校生10名のために、大学生活を知ってもらうためのプログラム内容（キャンパスツアーなど）を計画する」というという課題を調査参加者に与え、約30分の設定時間で会話を行ってもらった。課題が早く終わったグルー

プでは、終了部の会話が雑談になっている場合があるが、本研究では、課題を遂行している会話の部分のみを分析対象とした。

4. 発話の重複の分類

ここでは、本研究で用いる発話の分類について調査データにおける具体例とともに説明する。基本的には木暮（2002）の分類を参考にしながら、定義の変更や一部の名称の変更を行っている。大きな分類として、①同時開始型、②終了みなし型、③割り込み型の3つの型に分ける点では木暮（2002）と同じである。

まず、①同時開始型については、先行発話者が発話権を渡した後、先行発話者以外の会話の参加者2人が同時にターンを開始したために生じた重複と定義する。(1)は、母語場面(1)グループのデータからの具体例で、先行発話者のJP_F2が発話01で情報要求をした後、残りの会話の参加者であるJP_M3とJP_M4が同時にその応答の発話を開始したことにより発話の重複が起きている。

(1) 母語(1)グループ

- 01 JP_F2 図書館って、何時までですか。
 → 02 JP_M3 (1.0) [11時。(1.0) 10 (1.0) 分ぐらい？
 03 JP_M4 [11時？

次に、②終了みなし型については、ターンが移行可能な箇所、もう一人の発話者がターンを開始したために起きた重複と定義する。②終了みなし型は、さらに〈交替成功〉と〈交替不成功〉に下位分類される。〈交替成功〉とは後続発話者がターンを獲得した場合を指し、〈交替不成功〉とは後続発話者がターンを獲得できない場合を指す。

〈交替成功〉の具体例を見ていくことにする。(2)は、第三者言語接触場面(1)グループのデータからのもので、先行発話者CN_F1による発話01の移行関連箇所(Transition Relevance Place: TRP)で後続発話者KR_F1が発話を始めたことにより発話の重複が起こり、先行発話者CN_F1がターンを後続発話者KR_F1に譲るような形になっている。

(2) 第三者言語接触(1)グループ

- 01 CN_F1 別に、別に、みんな来て、ま、授業分かってもらうわけじゃないし、[様子とか、
 → 02 KR_F1 [そう、ただ見るだけだから。うん。

〈交替不成功〉の具体例は、母語（2）グループによる（3）である。ここでは、先行発話である発話01のTRPで後続発話者JP_F2が発話を始めるが、重複が起きた結果、後続発話者JP_F2は途中で発話をやめ、先行発話者のターンが終わったあとに、ターンをとっている。

(3) 母語（2）グループ

- 01 JP_M4 全員、なんか、[全員で食べるとも限らんしさー。
 → 02 JP_F2 [自由 うー
 ん、じゃあ、そ、その、

発話の重複の3つ目の型は③割り込み型であるが、これは先行発話者のターンの発話の途中、つまり、ターンが移行可能であると見なせない箇所では後続発話者がターンを開始することによって生じた重複と定義する。③割り込み型はさらに3つに下位分類されるが、その1つ目は〈調和系〉である。〈調和系〉とは、重なる発話が相手の発話内容と一致し、先行発話者の発話権も維持されている場合で、先行発話に対する同意・共感、関心、応答、驚き、理解などを表すものとする。

〈調和系〉の具体例は、次の母語（2）グループによる（4）と相手言語接触（2）グループによる（5）である。どちらも、先行発話のTRPとは見なせない箇所では後続発話者が発話を始めているが、それぞれ先行する発話の内容について、「まさにそう、そうなのよ。」や「うん、いいよね。」と、同意・共感を表すものになっている。この〈調和系〉の発話の重複は、竹田（2016）で指摘された、協調的な雰囲気を出し出す働きを持つタイプの発話の重複として典型的なものと言える。

(4) 母語（2）グループ

- 01 JP_M3 何やっていいか分かん [ないよね、それ。
 → 02 JP_M4 [そう。まさにそう、そうなのよ。

(5) 相手言語接触（2）グループ

- 01 VN_F2 最初の印象が、何、何か、いい印象を付けたほうが [いい
 と思う。
 → 02 JP_F1 [う
 ん、いいよね。

③割り込み型の2つ目の下位分類は〈調整系〉である。〈調整系〉とは、先行発話に対する確認、訂正、情報追加、関連質問、先取り応答などを行うことによる重複で、重複部分の発話内容が、先行発話者の発話内容と部分的に異なっているものを指す。(6)は母語(1)グループによる具体例であるが、ここでは、先行発話者JP_M2の情報要求あるいは確認要求に対して、後続発話者JP_M1が先行ターンの終了を待たずに応答の発話をしたことにより発話の重複が起こっている。(7)は第三者言語接触(1)グループによる具体例で、学食の混み具合に関連し、キャンパスツアーが授業のある日なのかどうかを話している文脈で、先行発話の発話03に対して情報を追加する働きを持つ発話04が重複を起こしている。

(6) 母語(1)グループ

01 JP_M2 ○○大学とはみたいな感じで、講演をするってこと [ではなく？

→ 02 JP_M1 [普通に授業をしたらいんじゃないですか？

(7) 第三者言語接触(1)グループ

01 NZ_M1 オープンハウスも、ああ、生徒ない。

02 CN_F1 いない日に、するんですよね。

03 NZ_M1 あ、いない日なら、10、ああ、12時 [は大丈夫けど。

→ 04 CN_F1 [だいたい、まあ、高校生が、まあ、まあ、(2.0)授業日かもしれないですよ。

③割り込み型の3つ目の下位分類は〈独立系〉である。〈独立系〉とは、先行発話者の発話途中でターンを開始することにより、相手の発話目的を達成する権利を奪っている重複を指す。先行発話の内容をさらに展開させたり、新たな話題を持ち込むもので、先行発話に対する妨害的な割り込みと捉えられる。

(8)は母語(1)グループによる具体例である。これは、新学部の説明の担当者を考えるという文脈で、学長はその担当者として適任ではないというJP_M1による発話01、および、それに賛同するJP_F1による発話02~03に対して、後続発話者のJP_M2は、発話03の途中から「それをカメラ目線で言ったらどうか」という、非言語行動についての助言を与える発話を割り込ませている。この発話04

は、新たな話題を持ち込む割り込みと捉えることができるが、先行発話者JP_M1の主張を間接的に支持するものであり、会話の進行に影響を及ぼす重複とは言えないと思われる。

(8) 母語 (1) グループ

- 01 JP_M1 いや、そこに学長出さなくてもいい [と思う。
 02 JP_F1 [ま、確かに。
 03 JP_F1 学長 [をわざわざ出すのはちょっと。
 → 04 JP_M2 [カメラ目線どう? カメラ目線 [どう。
 05 JP_M1 [学長いいっす。要らないっす。

(9) 第三者言語接触 (2) グループ

- 01 NZ_M2 送別会して、で、その後は、多分もう、仲良くなった人と会ったと思いますので。
 02 VN_F3 でも、なんか、女 [性。
 → 03 TW_F1 [でも、あまり、〇〇大学の、なんか、 [生活。
 04 VN_F3 [そう、生活とか、なんか、大学生は、結構高校生とか違うので。

(9) は第三者言語接触 (2) グループによる具体例であるが、ここではキャンパスツアーの最後のイベントを考える文脈で、発話02の先行発話者VN_F3は「女性」と言いかけた途中で、TW_F1による発話03に割り込まれ、結局、「女性」に関する発話はそれきりになってしまい、発話04では割り込まれた発話03の内容を受け継いだ発話を行っている。この場合は、徐 (2016) が述べた「ターン取りのため」の重複であり、(8) の母語場面での具体例とは異なり、会話の進行に影響を及ぼしている重複と言えよう。

5. 発話の重複の分析結果

前節で説明した発話の重複の分類に基づき、対象データに現れた発話の重複の用例を集計し、その結果を表2にまとめた。まずは、分析対象データの全体の発話数に対して、どのくらい発話の重複が起こっていたのかという点について見てみる。表2では、3場面各2種類のデータごとに、全体の発話数に対する発話の重

複の用例数の割合が示されているが、各場面ごとにまとめると、母語場面の場合は30.3%、相手言語接触場面の場合は13.9%、第三言語接触場面の場合は25.3%となる。つまり、相手言語接触場面においては、ほかの場面に比べて、発話の重複の発生が抑制されているという結果であった。

表2 発話の重複の用例数

	①同時開始型	②終了みなし型		③割り込み型			合計	全体発話数
		交替成功	交替不成功	調和系	調整系	独立系		
母語 (1)	81	43	6	132	36	4	302 (36%)	850
母語 (2)	57	24	2	75	35	0	193 (25%)	785
相手接触 (1)	10	7	0	15	2	0	34 (8%)	428
相手接触 (2)	41	12	1	31	12	0	97 (19%)	515
第三接触 (1)	60	63	33	71	29	2	258 (26%)	990
第三接触 (2)	38	35	16	35	34	2	160 (24%)	663

表2をもとに、それぞれのデータの発話の重複の合計数に対する、各分類ごとの用例数の割合をまとめた表が表3である。表3の中で、特徴のある数字として挙げられるのは、第三言語接触場面における〈交替不成功〉の割合である。母語場面や相手言語接触場面のデータでは、0~2%の割合しかないのに対して、第三言語接触場面では、それぞれ12.8%、10%を占めている。

表3 発話の重複のカテゴリーごとの割合

	①同時開始型	②終了みなし型		③割り込み型		
		交替成功	交替不成功	調和系	調整系	独立系
母語 (1)	26.8%	14.2%	2.0%	43.7%	11.9%	1.3%
母語 (2)	29.5%	12.4%	1.0%	38.9%	18.1%	0.0%
相手接触 (1)	29.4%	20.6%	0.0%	44.1%	5.9%	0.0%
相手接触 (2)	42.3%	12.4%	1.0%	32.0%	12.4%	0.0%
第三接触 (1)	23.3%	24.4%	12.8%	27.5%	11.2%	0.8%
第三接触 (2)	23.8%	21.9%	10.0%	21.9%	21.3%	1.3%

そこで、第三言語接触場面における〈交替不成功〉の具体例を見ることにする。(10)は、サークル関連のイベントを検討するにあたり、女子高生が合気道に興味を持つのかどうかを論じている文脈からのものである。先行発話者CN_F1による発話01、02、04に対して、後続発話者NZ_M1が再三発言しようとして発話をはさむのだが、先行発話者CN_F1がターンを譲らず、後続発話者NZ_M1はターンを獲得できない状態が続いている。このような、先行発話者が話し続けるために〈交替不成功〉の重複が連続して起きるといようなパターンは、この第三者接触(1)グループのデータにおいては、NZ_M1が先行発話者となりCN_F1が後続発話者となる逆の場合でも起こっている。これは、学習者の場合、一度頭の中で計画した発話を途中で臨機応変に変更するのが難しいということが要因の一つとして考えられる。

(10) 第三者言語接触(1)グループ

- 01 CN_F1 なんか、ちが、私も実は、日本の、そういうは、すごく興味があるんですよ。
- 02 CN_F1 で、だって、テレビでしか見てないので、興味すごく [あるんです。
- 03 NZ_M1 [でも、それは確かに
- 04 CN_F1 でも、日本の女子、[女子高校生、あ、あんまり、[それほど。ま、もう、
- 05 NZ_M1 [そう、日本の、じよは多分 [して
る、お、ま、もう分かる
- 06 CN_F1 普通学校でやってるかもしれないし、(1.0) [ねえ。
- 07 NZ_M1 [うん

表2に関連して、相手言語接触場面においては、発話の重複の発生が抑制されていたと述べたが、その要因としては母語話者の存在が考えられる。相手言語接触場面のデータにおいては、結果的に母語話者が議論の司会役、あるいは、ファシリテーター役を果たしており、ほかの場面に比べて、発話のやり取りがよりコントロールされていたからと考えることができる。ここでは、母語話者が関与する割合が高かった発話の重複があるのかどうか確かめるために、後続発話者が重複が生じる主要な要因になっている②終了みなし型と③割り込み型の発話の重複

について、母語話者が後続発話者になっている用例数、および、その割合について表4としてまとめた。

表4 相手言語接触場面の発話の重複における母語話者の関与

		②終了みなし型		③割り込み型		
		交替成功	交替不成功	調和系	調整系	独立系
全体の用例数	相手接触(1)	7	0	15	2	0
	相手接触(2)	12	1	31	12	0
母語話者が後続発話者である用例数	相手接触(1)	3	0	6	2	0
	相手接触(2)	5	0	15	8	0
母語話者関与の用例数の割合	相手接触(1)	42.9%	N/A	40.0%	100.0%	N/A
	相手接触(2)	41.7%	0.0%	48.4%	66.7%	N/A
(1) (2) を合わせた割合		42.1%	0.0%	45.7%	71.4%	N/A

(11) 相手言語接触(2) グループ

01 JP_F1 ここ? この教室? (1.0)

02 VN_F2 ちょっと狭い [かな。

→ 03 JP_F1 [あ、でも、入ろうと思ったら、 [入れる。

04 CN_M1 [じゃ、普通の教室でも。

表4によると、母語話者が後続発話者となる割合が高いのは③割り込み型の〈調整系〉であることがわかる。〈調整系〉とは、先行発話に対する訂正、確認、情報追加、関連質問などを行うタイプであり、ファシリテーター的役割との親和性が高いと考えられる。具体例の(11)では、授業見学の場所に関する文脈で、先行発話者VN_F2の提案懸念を表す発話02に対し、発話03で母語話者JP_F1がその懸念を否定する情報追加の発話を行っている。

6. むすび

以上、課題解決型授業の擬似的場面を設定して収集した3名による談話データをもとに、それぞれの場面における発話の重複の現れ方について分析・考察を行った。発話の重複の頻度については、相手言語接触場面においては、母語場面および第三者言語接触場面に比べて、会話全体の発話数に対する発話の重複の割合

が半分程度に抑制されていた。接触場面における発話の重複の特徴としては、第三者言語接触場面において、②終了みなし型の〈交替不成功〉の割合が高いことが挙げられた。これは、会話の進行に影響を与える可能性のある会話の重複であり、「共通語としての日本語」のコミュニケーションのあり方という点からもさらに検討していく必要があると思われる。また、相手言語接触場面においては、③割り込み型の〈調整系〉で母語話者が重複の後続発話者になっている割合が高かった。このことは、三者会話の相手言語接触場面における母語話者のファシリテーター的役割との関連が指摘された。

この研究は、JSPS科研費20K00717（研究題目：国際共修「共通語としての日本語」のための接触場面・母語場面の談話研究 研究代表者：竹井光子）の助成を受けたものである。

参考文献

- 木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり —母語場面と接触場面の会話について—」『日本語科学』11, 115-134. 国立国語研究所
- 徐麗潔（2016）「接触場面における日本語のオーバーラップ発話 —「ターン取りのため」のオーバーラップを中心に—」『日本研究論集』13, 71-87. チュラーロンコーン大学・大阪大学
- 竹井光子・吉田悦子（2018）「国際共修カリキュラム（相手言語接触場面）における母語話者の意識と役割」『2018 CAJLE Annual Conference Proceedings』274-283 Canadian Association for Japanese Language Education
- 竹井光子・吉田悦子・下條光明・藤原美保・渡辺文生（2018）「効果的な国際共修カリキュラム構築のための『共通語としての日本語』話者の言語行動の分析」2018 AATJ Annual Spring Conference（2018年3月22日 Washington D.C.）パネル発表資料 American Association of Teachers of Japanese
- 竹田らら（2016）「重複発話から創出される協調性 —親疎が異なった日本語相互行為の異ジャンル間比較からの一考察—」『社会言語科学』19（1）, 87-102.
- 渡辺文生（2020）「課題解決型会話の談話展開と提案の可決・否決：母語場面と第三者言語接触場面の対照」『山形大学人文社会科学部研究年報』17, 1-17.